調査報告

スマホネイティブ世代に必要なパソコン教育について

川喜田　多佳子　　寺家　尚美
高田短期大学キャリア育成学科　　三重県立津高等技術学校 OA 事務科

1.　はじめに

物心ついた時から、日常にスマートフォンがあり、SNS や動画共有サイトを当たり前に使いこなす 10 代（～23 歳くらいまで）の若者の世代を「スマホネイティブ世代」という。

スマホネイティブ世代は、パソコン利用率よりも、スマートフォンの利用率が高く、コミュニケーション手段がメールではなく SNS を利用する人が多いという傾向にある。総務省情報通信政策研究所の平成 27 年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査結果 [1] によると、パソコンの利用率は、10 代で約 65%、20 代では約 72%であるのに対し、スマートフォン利用率は、10 代が約 82%、20 代においては約 95%となっている。また、ソーシャルメディア利用について、10 代及び 20 代は、行為者率で見ると他の年代よりも著しく高い水準にある。それに対し、40 代、50 代では、ソーシャルメディア利用も増加傾向にあるものの、依然としてメール利用率が高いという結果となっている。このことから、ビジネスにおいては、上司世代とのコミュニケーションをはじめ、メール利用が必要であり、ソーシャルメディアだけでは、対応できない部分があると思われる。しかし、本学キャリア育成学科オフィスワークコース 1 年生の情報基礎演習講義においても、携帯のメールでさえ使用したことがない、自分のスマホにメールのアプリがあるかどうかも知らないという学生が見られた。わざわざパソコンを使わなくてもスマートフォン 1 つでなんでもできてしまう。情報検索、画像撮影、編集、SNS 公開までが簡単にできることがパソコン離れの原因であろう。そのような状況の中で、パソコンスキルが劣る学生が増えているという声があがってきている。

ある企業では新入社員にパソコンを 1 台配布し、パソコンの再教育を行っているという報告もある。企業や職業訓練校等でのパソコン研修事情や企業が求める情報スキルを踏まえながら、ビジネスとして必要なパソコンとネットワーク活用を行うための教育方法についてまとめる。

2.　本学におけるパソコンスキルの現状

授業内ではワープロ検定や表計算検定対策を強化している。多くの練習問題をこなすことで経験値を増やし、スキル向上を狙っている。

しかし本学のワープロ検定の合格率は、2016 年 7 月に一旦持ち直してはいるものの、年々下降し全体合格率を常に下回る状況となっている（図 1）。過去のデータは入手不可能であるが、

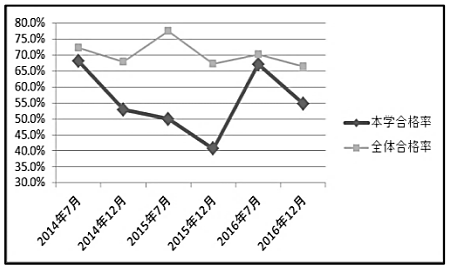

図 1　本学と全体の合格率の比較

7，8 年前までの本学ワープロ合格率は、全体合格率をほぼ上回る結果であったことを記憶している。スマートフォンが普及し始めた 2010 年前後より、パソコンの経験値が減少しはじめたと考えられる。受験者のほぼ全員が 1 年生である。総務省「通信利用動向調査 情報通信端末の世帯保有率の推移」[2]によると、2013 年にスマートフォンの普及が、前年の 13.1 ポイント増と急速に普及したことが報告されている。折しも本年度 1 年生が高校へ入学した年である。検定ではキーボードでの正確かつスピーディーな操作が求められる。

商業課程や情報に力を入れている総合課程出身の学生においては、高校時代に 2 級を取得済であるため準 1 級からの受験となる。普通課程出身の学生に比べ、経験値とスキルが高いはずなのだが、ここ数年は授業内でも大きな差はなくなってきている。これまで本学の準 1 級合格率は非常に高く、全体を下回ることはなかったが年々下がりはじめ、本年度 7 月の合格率は前回 12 月検定の 100%から 25%と合格者が激減している（図 2）。ホームポジションを守らない自己流タイピングでは 2 級まではなんとか合格することができる。準 1 級以上を狙うには正しいタッチタイピングに加え、それ相当なパソコン経験値が必要となる。本年度、本学の結果に対する検定協会の総評では脱行への指摘がこれまでにない数で報告された。脱行は手元を見ながらのタイピングで起こる現象である。スマートフォンのフリック入力では必ず手元を見ながら入力しなくてはならない。その影響がパソコンキーボード入力にも影響していると推測する。

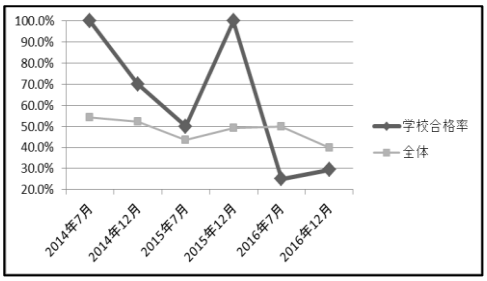

図 2　準 1 級の合格率の比較

IT コンシェルジュとしての活動から見えてくる状況は、配布ノートパソコンやタブレットパソコンの利活用度は低いということである。デジタルネイティブ第 2 世代と言われる学生達は、スマートフォンを利用したアプリ活用やソーシャルメディア活用など新しいサービスへの順応は早いが、パソコンのファイルやフォルダーへの概念が乏しく Windows を理解することが難しいのが現状である。

3.　ビジネスとして必要なパソコンスキルについて

スマホネイティブ世代は、フリック入力はできるがタイピングが遅いと言われているが、ビジネスでパソコンを利用するには、タイピング速度は高めておく必要がある。本学学生の検定結果からも、さらなる訓練が必要であるといえる。また、ビジネスメールの書き方などは就職活動でも必要であり、入社前に身に着けておく必要がある。

即戦力としてビジネスで活躍するためには、必要な資料を即座に作成できるスキルが求められる。たくさんある Office の機能について習得し、効率よく資料を作成するための操作スキルと、どう作成すればよいかを考える力が必要となる。

筆者が行っている再就職者向けの職業訓練において、受講者に前職で使用していた Office 機能について聞いた際に、企業によってかなり違いがあった。たとえば、Word において、変更履歴やコメントなど、Word の応用編で行うような機能を部署内で活用していた、Office のテーマを活用して、資料のイ

メージ作りをしていたという意見があった。また、Excel においては、製造業などにおいてはグラフやデータ分析、様々な関数を使用したデータの統計資料作成などがあげられた。企業によって使用している機能は大きく違い、多義にわたる。就職した先でどのような機能が必要になるかは就職してみないとわからないため、多くの機能を知っている必要があると思われる。

4.　今後について

フリック入力はできるがタイピングが遅いと言われる世代のために、タイピング練習を継続的に実施していく必要がある。また、ビジネスでの基本的なコミュニケーション手段であるメールにおいては、マナー、セキュリティ面を考慮した教育の実施が必要であると考える。Office ソフトについては、効率のよい正しい操作スキルを身につけさせることを第一とし、次に業務に必要な知識も踏まえた資料作成を実践することで、即戦力となる人材育成が必要である。

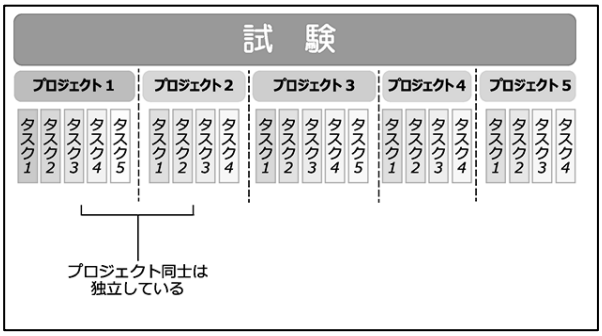

図３　MOS2016 試験 マルチプロジェクト形式

その中で、資格取得について、いろいろな検定を取り入れていくことも必要ではないかと考える。その１つとして、「Microsoft Office Specialist（MOS）」があげられる。MOS 試験については、賛否両論のある試験であると思われるが、Office ソフトの正しい操作能力を証明する資格試験としては、知名度も高く有用な資格だといえる。MOS 試験は、2017 年 1 月より Office2016 バージョンでの試験が開始される予定である。MOS 2010 では、問題数が 25～45 問程度出題されるが、前後の問題は互いに関連がないという「一問一答」形式の試験であった。MOS 2013 では、1 つのファイルを完成させる「ファイル完成型」という試験で、MOS 2010 に比べ、より現実に近い状況で操作スキルを評価する試験に変更された。

MOS 2016 は、「マルチプロジェクト」という出題形式に変わるとのことである（図 3）。MOS 2013 の「より現実に近い操作」という特色を活かしつつ、より広範囲な操作スキルを問う形式に改善された。マルチプロジェクトの「プロジェクト」は、操作を行うファイルを示している。2010 バージョンまでで実施されてきた一問一答方式と、2013 バージョンで実施されている課題完成型試験の中間的な試験構成となるようである。

MOS 試験を内定者や新入社員に対する研修の一環として導入している企業では、社員のパソコンスキルの平準化や底上げを目的としているところが多い。入社して各部署に配属された後は、専門知識や業務知識の習得に専念できるよう、パソコンを効率よく使いこなせる状態にしておきたいからである。また、企業が MOS 試験を導入する理由の１つに、Office 製品にある多くの機能を知り、使いこなせることで、どの機能を使って資料を作り上げれば効率が良いかなどが、仕事を頼まれた時点で瞬時に理解できる能力が身につくことを挙げている。効率よく資料を作成する機能を知っていれば、どういう内容で作れば相手に理解できる資料を作成できるかなどを考えるために多くの時間を割くことができると考

えられているからである。

本学卒業生の就職先は多方面にわたっている。そこで、まずは多くの機能を知り、完璧に使いこなすことができれば、どのような就職先でも適用でき、即戦力となることができるのではないかと考える。現在導入している日本情報処理検定試験と合わせて取り組むことで、パソコンスキルの土台作りとして活用し、自分のスキルに自信を持って就職できるようになると考える。その他の資格としては、「IT パスポート試験」や、2016 年度からスタートした「情報セキュリティマネジメント試験」があげられる。「情報セキュリティマネジメント試験」は、今後さらに企業において重要視されてくる資格試験ではないだろうか。企業の情報セキュリティに関する知識を取得、証明する資格といえる。「情報セキュリティマネジメント試験」は、午前と午後に試験があるかなりボリュームがある国家試験である。筆者が受験した際には高校生らしき学生の姿も見受けられ、学生にも注目されている試験であることがうかがえた。しかし、「IT パスポート試験」や「情報セキュリティマネジメント試験」については、内容が広範囲かつ深いため、短期間での取得は難しいと思われる。

表１　情報セキュリティマネジメント試験の概要

	試験時間	出題数	出題内容
午前	90分	出題数：50問	企業人として必要なセキュリティに関する知識、法規、マネジメントなどの知識を問う問題
午後	90分	出題数：3問	業務現場で起こったケーススタディをもとに情報セキュリティ管理の実践力を問う問題

そこで、本学でも取り入れている「P 検」が有効であると思われる。MOS が Office の操作スキルを高めるものであるのに対し、P 検は ICT の活用知識を高めることができる資格であるといえる。Office の操作スキルとあわせて学習することで､広いコンピュータ知識の習得を目指すことができると考える。

5. まとめ

本学学生のパソコンスキルからも考察できるように、まずは基本をしっかり習得させることが大切である。

基礎固めとその証明として、検定合格を目指す。就職活動において、履歴書に記載できる取得資格があることは、パソコンスキルの基礎レベルは習得できていることの証明になると考えるからである。しかし、検定に受かることばかりにとらわれてしまうと、単なる暗記に終わってしまう場合がある。実務で即戦力となるためには、自分で内容を考え、まとめあげていく力をつけさせる必要がある。ビジネスのいろいろなシーンを想定した資料作成ができるよう、より仕事に直結した授業カリキュラムの構築に加え、地域や企業との連携活動を通じて、ネット上ではない現実の組織や人との関わりながら、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけ、自信を持って生き生きと活躍できる人材育成を目指していきたい。

[1] 総務省情報通信政策研究所　2016　『平成 27 年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査結果』

[2] 総務省　2016　『平成 28 年通信利用動向調査』